

アンドロメダ座を見張っていた早期探知衛星が最初の兆候をとらえたとき、人類の準備は整っていた。ところが計画主任の野嶋孝司は家族を連れて帰省中だった。

瑞城弥生は筑波宇宙センターで残業していた。

「もしもし、野嶋さん、いまどこですか？」

『愛媛の実家だが、どうした？ H2ロケットが爆発でもしたか？』

「来たんです！ あと三十分で木星軌道半径を横切ります！ 〇・一三〇です。地球まで五時間しかありませんよっ！」

弥生は泣き声だった。

『あわてるな。演習どおりコマンド送出の準備にかかれ。ボタンは君が押すんだ』

「でっ、でも、あれは野嶋さんがしないと！」

『誰がやっても同じだ。子供だろうが年寄りだろうが、日本人だろうがイタリア人だろうが、地球人なら誰でもかまわん。だが君がそこにいるなら君だ』

「わ、わかりましたっ！」

弥生は受話器を置いた。管制センターに駆け込む。当直の二人に事情を説明し、衛星捕捉にかからせる。NASAの追跡管制網への接続もまかせる。

弥生はMFH計画の手順書をひっぱり出してページを繰った。

メッセージ・フロム・ヒューマノイド計画。その最終フェイズ。

「NASCOM接続オーケーです」

当直の一人が告げた。

「瑞城さん、これって本番ですか？」

「本番です本番です。ええと、まず衛星をウォームアップしなきゃ。ええと、ええと、ああそつだ、専用パネルがあるんだ」

端末でMFHオペレーション・システムを立ち上げる。

落ち着け。GUI環境で操作できるんだ。なにも難しくないんだ。

最終フェイズのボタンをクリック。パスワード入力。